

県中教研 保健体育部会だより

第 33 号

発行日 平成30年3月
発行所 富山市千歳町1-5-1
富山県中学校教育研究会
編集責任者 岩田 正弘
題 字 金山 泰仁 先生

年間指導計画・単元計画の見直しを

主任指導主事 梨谷 一男

今年度、中学校教育課程研究大会で一緒に学ばせていただく機会がありました。今年の授業では、ICT器機を効果的に活用した授業実践が印象に残っています。特に、タブレットPCを生徒が当たり前のように使いこなし、自分たちの動きを客観的に見て、改善に生かそうとしている姿に感心しました。まさしく、体育分野の目標にある運動を豊かに実践している姿であったと思われま

す。さて、7月に学習指導要領解説保健体育編が公開されました。中教研の協議会の中で時々話題に上がっていた男女共習については、「原則として男女共習で学習を行うことが求められる」と記載されていました。また、昨年2月に行われた体育主任会で課題として取り上げた3年生の選択についても、「複数教員配置校においては生徒が選択して学習ができるよう配慮することや、単数教員配置校においては、生徒の希望ができる限り可能となる教育課程編成の工夫が求められる」と示されました。いずれにしても、今までの協議会での話題や授業実施上の課題について、その対応が明らかになりました。

平成33年度からいよいよ新学習指導要領が全面実施となります。その間、移行措置として平成31年度の中学校1年生、平成32年度の中学校1・2年生を対象とした体育分野や保健分野について、学習内容に抜け落ちがないように配慮することは、すでにご存じのことと思います。さらに、今程述べた男女共習や生徒選択の実施についても、既存の年間指導計画や単元計画を今一度、見直すことが大切です。見直しをすることで、学習指導要領のねらいとする、豊かなスポーツライフの実現を目指す授業実践ができるとともに、運動に主体的に取り組む生徒の育成にもつながっていくと思われま

(西部教育事務所)

運動に親しむ生徒の育成を目指して

部長 岩田 正弘

本年度の第61回研究大会では、2つの会場に参加させていただいた。どの会場も研究主題の解明に向け、生徒が課題意識をもち主体的に学ぶ姿が多く見られた。また、いずれの授業も、授業規律が確立し、教師と生徒の信頼関係や生徒相互の好ましい人間関係が見られ、日々の実践の積み重ねが伝わってくる授業であった。

部会協議の後半では、桐蔭横浜大学スポーツ健康学部の佐藤豊教授から「授業力向上に向けたICT活用」と題して講演が行われ、本時の授業に対しての指導助言だけでなく、ICT機器の効果的な活用方法や新学習指導要領の方向性についてお話をいただいた。

また、今年度の郡市部長会や研究部協議会では、ICT機器の活用に関するだけでなく、今年度の研究大会の成果や課題等について、様々な意見が出された。

これらを踏まえ、今後は、指導と評価が一体化した指導計画の作成等について改めて確認を行い、それらに加え、ICT機器の効果的な活用等に研修を深めていくことが必要だと思われる。

10月スポーツ庁は「体力・運動能力調査」の結果を発表した。それによると、子供たちの体力は緩やかな上昇傾向を示しており、これについて同庁は、体力向上のポイントは「運動の習慣化にある」と説明している。

このように、学校体育の役割や期待は、年々大きくなっている。今後も、生徒の健やかな成長を願い、保健体育科の現状と課題をしっかりと捉え、生涯にわたって運動に親しむ生徒の育成を目指し、研修と実践を積み重ねていきたい。

(高・志貴野中)

第61回 研究大会の取組

新 川 地 区

(滑・早月中)

3年 陸上競技「長距離走」

指導者 広井 聡一

3年生男女による陸上競技「長距離走」の授業が提案された。

能力と課題に近い生徒同士がペアになり、自分に適したペースを考えながら、練習方法を工夫してペース走に挑戦する授業展開であった。どの生徒も練習やペース走に積極



的に取り組み、随所で生徒同士の声掛けが見られ、活発な学び合い活動が行われていた。気温の低い中であったが十分な運動量が確保され生徒たちは汗を流しながら課題に取り組んでいた。

部会協議①では、本時におけるペア学習の効果や、生徒たちがどのような声掛けを行っていたかなどの意見交換がなされた。

宮脇哲也指導主事(東部教育事務所)からは、「学習課題と授業の流れは目で確認できた方がよい」「練習前に、フォーム・腕振り・歩幅・呼吸等のキーワードをあげ、ポイントを掴ませるとよい」「授業の中で、どのようなアドバイスができるのか考えられるように仕向けられるとよい」等の指導助言をいただいた。

部会協議②では、佐藤豊教授(桐蔭横浜大学)による講義が行われた。講義では学習指導要領改



訂の方向性や、資質・能力の育成と主体的・対話的で深い学び

の関係についての話を聞くことができた。ペア学習に関しては、協力することでお互いの学習が行いやすくなり、そのための有効なサポートとして相手の望みを知って相互観察を行うことが必要であり、賞賛的な声掛けや肯定的な声掛けが生徒同士の満足度を上げるという話も聞くことができた。

鈴木 大地(中・雄山中)

富 山 地 区

(富・呉羽中)

3年 球技「ソフトボール」

指導者 星野 悟志

3年生女子による球技「ソフトボール」の授業が提案された。提案授業は雨天により体育館での活動になったが、ICT機器で前時の自分たちの動きを確認し、仲間同士アドバイスをし合い課題を解決する学習活動であった。

簡易ゲームでは失点を減らそうとチーム内で自分の考えや思いを仲間に伝えたり、仲間の考えを聞き入れたり課題解決のための学び合いの場面が多く見られた。

部会協議①

では、部員から「体育館での狭いスペースを有効に使い、運動量も



十分確保されていた」「ICT機器を有効に活用することで視覚的にイメージがつかめ、自ら考えたり工夫したりする場面ができていた」「教師が前時の練習を撮影し、動画にポイントを書き込み説明することで、生徒の理解がより深まっていた。ICT機器が効果的に活用されており今後の参考になった」等の感想が多く聞かれた。

竹内静指導主事(東部教育事務所)からは、「生徒は生き生きと活動し、たくさんの笑顔が見られた。また本時の学習の進め方や見通しが分かり、学習の意欲付けがなされていた」等の感想をいただいた。

また部員全体に対し、今後は新学習指導要領の完全実施に向け、平成31年度からの対応を考えていかなければならない。学習内容や生徒の体力の実態、性別等を考慮し、学習指導要領に基づいた教育課程を編成すること等の助言をいただいた。

亀山 寿光(富・芝園中)

第61回 研究大会の取組

高岡地区

(高・高陵中)

3年 球技「ハンドボール」

指導者 有島 未紗

「ゲームの中でスパイクをしよう。」を学習課題に、3年女子による球技「バレーボール」の授業が提案された。

準備運動、パス練習から生徒は主体的に取り組んでいた。本時の課題確認では、指導者がICT機器を使用し、よいスパイクのイメージをもたせ、練習方法や授業の流れを確認して進められた。



スパイク練習では、タブレットPCを活用し、個々の課題をリーダー中心に生徒同士で話し合ったり声をかけ合ったりして、とても温かい雰囲気の中でグループ学習ができていた。ゲームでは、特別ルールを用いて、全員がスパイクに挑戦しようとする姿が見られ、課題解決に向けて生徒同士が関わり合う場面が多く見られた。

部会協議①では、「タブレットPCのよりよい活用の仕方」「話し合いの視点」等に関して活発に意見が交わされた。



北島由紀子指導主事からは、新学習指導要領に合致した授業展開であった。

また、タブレットPCに一本線を引くだけで話し合いが活発になり、課題が見つかったら、どんな練習を行えばよいのか提案していくことでさらに深まりのある授業展開になることや全体計画に、学習活動と評価計画を書き込み実践に生かして欲しいと指導助言をいただいた。

部会協議②では、授業力向上アドバイザーの佐藤豊教授より、本時の授業と照らし合わせて、全体計画の立て方やタブレットPCの活用の仕方、話し合いを活発にさせる手立て等、具体的に助言していただいた。

小林 潤子 (射・新湊中)

砺波地区

(南・城端中)

2年 陸上競技「リレー」

指導者 山崎 洋

「テークオーバーゾーン内20mのパスタイムを縮めよう」を学習課題に、2年生男女共習による陸上競技「リレー」の授業が提案された。

授業では、「互いのスピードを生かしたバトンパス」のために必要な技能のポイントを見付け、適切に練習することや互いに協力したり、学び合ったり



して練習に取り組むことができることを目標として展開された。テークオーバーゾーン内のパスタイムと、事前に測定しておいた生徒の20m加速走のタイムとの差を比較し、バトンパスの技能の向上を感じ取りやすくなるように工夫されていた。



生徒は、必要に応じてICT機器を活用し、アドバイスをし合いながら練習に取り組んでいた。

部会協議では、「ICTを活用することによりタイム短縮のためのポイントが、生徒から出されていたところが良かった。」「バトンパスの技能向上に特化しているが、競い合いがないところが、今後の課題ではないか。」などの意見が出された。

梨谷一男主任指導主事(西部教育事務所)からは、「生徒の視点に立った授業であった。」「何度も練習できる環境や映像から学びとる大切さ、学習カードの使い方や学習の流れが分かるよう工夫されている。」「感性やコミュニケーションを磨きながら、対話のある授業にしていくことが必要である。」など、貴重な助言をいただいた。

中川 高史 (砺・庄西中)

平成29年度

第65回 金沢大学附属中学校 教育研究発表会

研修報告

報告者 富山大学人間発達科学部附属中学校

教諭 宮腰 卓央

平成29年11月23日、第65回金沢大学附属中学校教育研究発表会が開催された。平成26年度から平成28年度まで、3年間研究を進めてきたESD (Education for Sustainable Development : 持続可能な開発のための教育) の取組を基盤とし、平成29年度より2年間、国立教育政策研究所の研究指定を受け、次期学習指導要領を見据えて、以下の研究主題解明に向けて伝統文化教育に取り組んでいる。

研究主題

伝統文化教育を中心とした教科等横断的な
カリキュラムの開発
ーグローバル社会に生きるために必要な
資質・能力の育成を目指してー

研究の視点は、教科等の授業をベースにしつつ、伝統文化教育にそれぞれの教科等がどのように関わることができるのかを明らかにし、教科横断的な単元(題材)を開発することである。そのための手立てとして、生徒の視点に立ったカリキュラムマップの作成や全ての教科等が関連した3年間のカリキュラムマネジメントの実施が挙げられている。

また、グローバル人材の育成に向けて、以下の3つの要素を具体目標として、生徒に身に付けさせたい要素を明確にした授業づくりが進められている。

【要素①】 語学力・コミュニケーション能力

【要素②】 主体性・積極性・チャレンジ精神、
協調性・柔軟性・責任感・使命感

【要素③】 異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ

(グローバル人材育成推進会議)

さらに、以下の6点を教育活動のグランドデザインとしてまとめ、全教職員が共通理解のもと、新しい時代に求められる資質・能力の育成に向けて授業研究に励んでいる。

① 『何ができるようになるか』

(育成を目指す資質・能力)

② 『何を学ぶか』

(教科等を学ぶ意義と、教科等間・学校段階間のつながりを踏まえた教育課程の編成)

③ 『どのように学ぶか』

(各教科等の指導計画の作成と実施、学

習・指導の改善・充実)

④ 『子供一人一人の発達をどのように支援するか』

(子供の発達を踏まえた指導)

⑤ 『何が身に付いたか』

(学習評価の充実)

⑥ 『実施するために何が必要か』

(学習指導要領等の理念を実現するために必要な方策)

○公開授業 1年女子 柔道

・ねらい 膝車の行い方を理解し、つり手・引き手の使い方に着目して、相手に分かりやすくアドバイスすることができる。

生徒たちは、道着の着用や礼法、受け身の仕方等、柔道の基本的な動きを確実に習得しており、これまでの学びの成果が見られた。

本時の主たる活動、4人グループでの約束練習を前述の【三要素】と『グランドデザイン』の視点から振り返ってみたい。

2人が練習する様子を残りの2人が観察・助言する指導方法は、
【①コミュニケーション能力】、

【②主体性・チャレンジ精神・協調性】の育成に効果が高く、生徒が『③どのように学ぶか』という思考過程を確認することができた。練習では、多くの生徒が「どうだった」「いい感じにできていた」等、すぐに言葉を交わし合う姿が見られた。また、約15分の練習時間を設定したことは、4人がそれぞれ何度も試行錯誤する機会を生み、生徒同士の自主的・協働的な活動を助長することにつながった。さらに、苦手意識がある生徒も仲間の助言や励ましを受けて、粘り強く活動に取り組むことができた。これらのことから、教師が『②何を学ぶのか』を生徒に確実に理解させたいと、少人数での活動を展開することは、意欲的な学習につながるということが分かった。

生徒たちの可能性をさらに伸ばすために、『④一人一人の発達』に応じた教師の具体的な技術指導と生徒相互が『⑤何が身に付いたか』を確認し合うための基準(技のチェックリストや動画での分析方法等)設定、『①何ができるようになるか』を方向付ける意図的な発問の工夫、これらを研究・実践していくことが今後の授業力向上につながると感じた。



4人グループでの約束練習